表

壬申の乱と万葉集と

上野誠（奈良大学）

はじめに

■戦後文学　■大きな傷を癒す　■生きる意味　■戦時体制と戦後日本……天皇の位置付け

一、記紀の誕生

▼飛鳥（あすか）の清原（きよみはら）の大宮に太八洲（おほやしま）しらしめしし天皇の御代に暨（およ）びて、潜竜元を体し、洊（せん）雷期に応（こた）へき。夢の歌を聞きて業を纂（つ）がむことをおもほし、夜の水（かは）に投（いた）りて基を承けむことを知らしたまひき。然れども、天の時はいまだ臻（いた）らざりしかば、南の山に蟬のごとく蛻（もぬ）けて、人と事（こと）と共に給（た）りて、東の国に虎のごとくに歩みたまふ。皇輿たちまちに駕して、山川を凌ぎ度り、六師雷のごとく震ひ、三軍電のごとく逝きき。杖矛（ぢやうぼう）威を挙げて、猛士烟のごとく起り、絳旗（かうき）兵を耀かして、凶徒瓦のごとく解けたり。

（『古事記』序文）

▼ここに天皇詔したまひしく、「朕聞くならく、『諸家の賚（も）たる帝紀と本辞と既に正実に違ひ、多く虚偽を加ふといへり』。今の時に当りて、その失を改めずは、いまだ幾年（いくとせ）を経ずして、その旨滅びなむとす。これすなはち、邦家の経緯たり、王化の鴻基（こうき）たり。故（かれ）、ここに帝紀を撰録し、旧辞（くじ）を討覈（たうかく）して、偽を削り実を定め、後葉（の

ちのよ）に流（つた）へむと欲（おも）ふ」とのりたまふ。時に舎人（とねり）あり、姓（うぢ）は稗田（ひえだ）、名は阿礼（あれ）。年は廿八。人となり聡明にして、目に度（わた）れば口に誦（よ）み、耳に払（ふ）るれば心に勒（しる）す。すなはち、阿礼に勅語して、帝皇の日継（ひつぎ）と、先代の旧辞とを誦み習はしめたまふ。

（『古事記』序文）

■修史のはじめ　■新しい歴史　■天武新王朝の修史事業

二、高市皇子挽歌

高市皇子尊（たけちのみこのみこと）の城上（きのへ）の殯宮（あらきのみや）の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首〔并せて短歌〕

かけまくも　ゆゆしきかも〈一に云ふ、「ゆゆしけれども」〉　言はまくも　あやに恐（かしこ）き　明日香の　真神（まかみ）の原に　ひさかたの　天つ御門（みかど）を　恐くも　定めたまひて　神（かむ）さぶと　岩隠りますや　すみしし　我が大君の　聞こしめす　背面（そとも）の国の　真木（まき）立つ　不破山（ふはやま）越えて　高麗剣（こまつるぎ）　和射見（わざみ）が原の　行宮（かりみや）に　天降（あも）りいまして　天の下　治めたまひ〈一に云ふ、「払ひたまひて」〉　食（を）す国を　定めたまふと　鶏（とり）が鳴く　東（あづま）の国の　御軍士（みいくさ）を　召したまひて　ちはやぶる　人を和（やは）せと　まつろはぬ　国を治めと〈一に云ふ、「払へと」〉　皇子ながら　任（ま）けたまへば　大御身（おほみみ）に　大刀（たち）取り佩（は）かし　大御手に　弓取り持たし　御軍士を　率（あど）ひたまひ　整ふる　鼓（つづみ）の音は　雷（いかづち）の　声と聞くまで　吹き鳴（な）せる　小角（くだ）の音も〈一に云ふ、「笛の音は」〉　あたみたる　虎か吼（ほ）ゆると　諸人（もろひと）の　おびゆるまでに〈一に云ふ、「聞き惑ふまで」〉　さ

さげたる　旗のまねきは　冬ごもり　春さり来れば　野ごとに　付きてある火の〈一に云ふ、「冬ごもり　春野焼く火の」〉　風のむた　なびかふごとく　取り持てる　弓弭（ゆはず）の騒（さわ）き　み雪降る　冬の林に〈一に云ふ、「木綿（ゆふ）の林」〉　つむじかも　い巻き渡ると　思ふまで　聞きの恐く〈一に云ふ、「諸人の　見惑ふまでに」〉　引き放つ　矢の繁（しげ）けく　大雪の　乱れて来（きた）れ〈一に云ふ、「霰（あられ）なす　そちより来れば」〉　まつろはず　立ち向かひしも　露霜の　消（け）なば消（け）ぬべく　行く鳥の　争ふはしに〈一に云ふ、「朝霜の　消なば消と言ふに　うつせみと　争ふはしに」〉　渡会（わたらひ）の　斎宮（いつきのみや）ゆ　神風（かむかぜ）に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず　常闇（とこやみ）に　覆ひたまひて　定めてし　瑞穂（みづほ）の国を　神（かむ）ながら　太敷きまして

（以下省略）　（巻二の一九九）

三、聖地・吉野

天皇の御製歌

み吉野　耳我（みみが）の嶺に　時なくそ　雪は降りける　間なくそ　雨は降りける　その雪の　時なきがごと　その雨の　間なきがごとく　隈もおちず　思ひつつぞ来（こ）し　その山道を　（巻一の二五）

天皇、吉野宮に幸（いでま）せる時の御製歌

よき人の　よしとよく見て　よしと言ひし　吉野よく見よ　よき人よく見

紀に曰く、「八年己卯（きばう）の五月、庚辰（かうじん）の朔（つきたち）の甲申（かふしん）に、吉野宮に幸す」といふ。　（巻一の二七）

■六皇子盟約　■柿本人麻呂の登場　■ラ・マルセーズ　■貴州省遵義（一九三五年）

四、壬申の年の功臣たち

壬申の年の乱の平定（しづ）まりにし以後（のち）の歌二首

大君は　神にしませば　赤駒（あかごま）の　腹這（はらば）ふ田居（たゐ）を　都と成しつ

右の一首、大将軍贈右大臣大伴卿の作

大君は　神にしませば　水鳥の　すだく水沼（みぬま）を　都と成しつ（作者未詳なり）

右の件（くだり）の二首、天平勝宝四年二月二日に聞き、即ちここに載せたり。

（巻十九の四二六〇、四二六一）

■語り継がれる功臣たち（直木孝次郎）　■語ることの大切さ　■歴史の起点

五、伊勢と天皇

天皇の崩（かむあが）りましし後の八年の九月九日、奉為（おほみため）の御斎会（ごさいゑ）の夜に、夢の裏（うち）に習ひ賜ふ御歌一首〔古歌集の中（うち）に出でたり〕

明日香の　清御原（きよみ）の宮に　天の下　知らしめしし　やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　いかさまに　思ほしめせか　神風（かむかぜ）の　伊勢の国は　沖つ藻も　なみたる波に　塩気のみ　かをれる国に　うまこり　あやにともしき　高照らす　日の皇子

（巻二の一六二）

■斎会　■神宮の位置づけ　■聖武天皇の彷徨　■天武天皇の御魂のゆくえ

おわりに

■偉大なる戦後を生きる　■鎮魂の文学　■戦後を生きるということ　■凱旋門で……在郷軍人会